

巻頭言

学校教育の現場にも生きる者として  
——小さなつぶやきと大きな期待——

重富 勝己

「ウェスレーと教育」という主題で日本ウェスレー・メソジスト学会誌『ウェスレー・メソジスト研究』第9号がここに発刊されることを学会員の一人として心から喜ぶ者である。

私事で甚だ恐縮であるが、大学生の時にフリーメソジストと呼ばれる群れに属する教会に導かれ洗礼を受けた。平信徒として五年間のサラリーマン生活ののち、献身し神学校に学んだのであるが、恥ずかしながらJ. ウェスレーの名前を自覚的に耳にするようになったのはその時がはじめてであったと言って良い。やがて徐々にウェスレーの原典（といっても翻訳が中心であることは否めなかったが）に触れるようになって以降、ウェスレーは単に「全き愛」を説く説教者、伝道者であるだけではなく、聖書語学は言うに及ばず古典語から近代語に至るまで習得した語学の達人であるということを知り、まさに「知の巨人」であるとの印象をいつしか深めるようになった。これは筆者のウェスレー観の一端に過ぎないが、その思いは今に至るも大きくは変化していない。適切な比較とは言えないとお叱りを覚悟しつつ、日本で言えば南方熊楠のような存在に秘かになぞらえてしまう自分が居るのである。

もちろん、ウェスレーを単なる「知の巨人」で終わらせたのでは、現代の我々にとって彼を単に遠くて無縁の存在としてしまうだけである。「知」のエキスパートであることは誰にでも真似できることではないし、真似したところで、

さしたる意義のあることとも思えない。現代はそれぞれの専門分野が多様化して知の分野の肥大化が起きていると言われる時代である。ポジティブに表現するならば「学際化」と言えようが、それは反面、知の限りない「断片化」、あるいは本質の「周縁化」が起こっている時代とも換言できるのではないだろうか。あるいは絶対的視点に立つよりも多元主義的価値観に基づいた相対的方法論による挑戦がキリスト教の各専門分野で起きていると言っても良い。もちろん、いかなる方法論であってもそれらに謙虚に学ぶ必要まで否定するつもりはない。

そのような中でウェスレーの神学は「たとえ預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようと、……愛がなければ、無に等しい」（1コリント 13：2）。すなわち聖書に基づいた、あるいは愛に基づいてそれらを統合する原理へと高めて行ったという点において、現代的な意義を担い続けていると言える。

当学会誌第1号の特集テーマが「神学者ウェスレー」であったことを改めて想起したい。そこで提起されたことが「日本ウェスレー・メソジスト学会」の一つの立脚点であり続けるのではないかと筆者は今でも考えている。もちろんそれを狭い意味で言うのではない。同特集号で岩本助成氏はその第一論文「神学者 ジョン・ウェスレー」において「なぜ、馬に跨った伝道者ウェスレーという人物像だけが定着してしまったのか」（同号9頁）と問いかけた。それは、我々自身がステレオタイプのJ. ウェスレー像から脱却し、現在も進められている校訂版全集をはじめとしたジャーナルや説教集、論文、手紙等の第一次資料や文献を精緻に読みこなし上で総合的な人物像を再構築して行く必要を訴えたものと理解する。我々は単なる古典愛読者でも懐古主義者でもない。ウェスレーをそのように研究することで、この21世紀の複雑に入り組んだ国際社会にも十分に貢献可能な神学を期待できるということでもある。J. ウェスレーに学ぶということは、そのような可能性にわれわれが常に開かれているということ、そして各自の専門分野からもそのことに寄与でき得るということではないだろうか。そのような思いを当学会の活動を通して、いつも再確認させていただいて来たと思っている。

さて、筆者は特に聖書学プロパーとして本学会に関わり続け、聖書原語に基づいた膨大な聖書注解を著した聖書学者としてのJ. ウェスレーから汲めども尽きない学びを得てきたと思っている。この度、巻頭言の依頼を受けた時、主題の教育ということに関して言えば、それは教育者としてのJ. ウェスレーについて言及するという点に発展して行くだろうとの予測を持ちつつも、教育（学）という分野にはほとんど何の識見を持たない者として何を語るべきか、やや戸惑いを隠せないでいるのが正直なところである。

J. ウェスレーは言うまでもなくキングスウッド・スクールを創設し、260年後の今日においてもその教育のわざは営々と続けられている。単なる継続ではもちろん意味がない。この点、深町正信氏はそのキングズウッド・スクール創立250年祭の会議に招かれ、当時の校長の記念講演を拝聴した感想を次のように述べている。

「ジョン・ウェスレーの望みはキリスト教の規範に正しく従う生徒を生み出すことにあり、この学校を創立した……ウェスレーの指導のもとに、生徒たちは授業や礼拝において厳しい規則を堅持し、信仰と知の厳しい訓練を課せられ、その生活で両方とも満たされました。その結果、ウェスレーの言う“Holiness is Happiness”という信仰が実現されたと、……このような教育が二百五十年間を通じて、受け継がれ、この伝統ある教育を受けた多くの優れたリーダーや教育者たちが、世界の種々の分野で活躍し、献身的に働いていることを熱心に語られました。」（『ジョン・ウェスレーと教育』青山学院大学キリスト教文化研究センター編、1999年、4頁）

筆者は特にキリスト教主義学校の末席を汚している者として、このような伝統の継承ということをどのように展開して行くべきなのかについて、今も深く悩みを抱えた者であることを正直に告白したい。そしてますますウェスレーに学ばねばならないとも思っている。

「キリスト教学校教育の充実発展を図り、わが国の教育に貢献すること」（規約第3条）を目的として1910年に発足したキリスト教学校教育同盟に拠ると、

現在そこに参集する 101 の学校法人下に設置された小学校から大学院までの学校数は 287 校、そこに学ぶ小学生から大学院生までの総数は 34 万 2 千人、教員数（専任と非常勤）は 3 万 2 千人、専任職員数は 6 千 2 百人に及ぶとされる（『キリスト教学校教育同盟』2008 年名簿による）。それとは別にキリスト教教育を掲げる幼児教育・施設（幼稚園・保育園）の連合体であるキリスト教保育連盟には、筆者も教会附属保育園の経営者として、また連盟理事として関わらせていただいているのであるが、そこには約八百弱の加盟園が存在し、おそらく 10 万を超える園児が存在していることも付言しておきたい。（カトリック系の諸学校についての統計が、たんに手許にないという理由で言及できなかったが、無視したわけでも差別しているわけでもないことをお断りしておく。）

筆者はまた 2007 年 7 月、広島女学院大学で開催された「国際メソジスト関係学校・大学連盟 (IAMSCU)」の日本におけるメソジスト系の諸学校の集まりに出席させていただいた。日本では正式な組織体ではないようなので、キリスト教学校教育同盟中、何割がそれに該当するのか統計が掴めないが、決して小さくはない比率と推定される。そこで、青山学院、関西学院は言うに及ばず、それらのメソジスト系の諸学校が日本の教育史上で歴史的に果たして来た役割の大きさに、あらためて意を強くする思いを持つことができたのは幸いであった。

わが国では現在でも、かくも多くの人々がメソジスト系諸学校をはじめとした、キリスト教主義教育機関の下に、教育を受け、また教育に従事しているのである。しかしそこで、信仰の適切な継承がなされていると言えるかどうかは別問題である。もちろん学校教育機関だけで教育が行われているのではない。教会学校教育や信徒教育等の教会によって積み重ねられてきた歴史と伝統が無視されて良いわけでは決してない。しかしながら、今ほどキリスト教主義学校と教会がそれぞれの資源を活かし合って連携し、日本の伝道に資して行くことの大切さが強調されねばならない時代もないと言えるのではないか。その重大な課題を達成するためには歴史的な振り返りから出発することが何よりも重要な要素であり、当学会員の目指すウェスレー・メソジスト研究の視野がその可能性を拓いてくれるものと信じる。

今特集号においては主題に即した三本の論文が寄せられているが、上述した目的に寄与して行く内容であることを期待したい。そのうち、大森氏と鈴木氏の二本の論文は昨年9月の学会発表に基づいたものであり、野村論文はこの学会誌のために書き下ろされたものである。筆者の浅学の故に過ぎないが、上記で言及した青山学院大学キリスト教文化研究センター編『ジョン・ウェスレーと教育』以外には、ウェスレーと教育という主題に言及した類書が極めて少ないと思える中、本学会誌が教会と学校教育機関で読まれることを切望したい。

大頭氏の意欲的な投稿論文、馬淵氏の英国への調査旅行記、清水氏と山田氏の二つの書評も合わせ読まれることを通して、奇しくもプロテスタント宣教150周年と言われるこの年、メソジストの伝統の中に生きる当学会関係者が、自らの役割を再確認し自信をもって出発する契機となればこれに勝る幸いはない。

(大阪キリスト教短期大学教員、京都西教会・桜井聖愛教会牧師)